

14. 本学の口腔外科小手術に対する過去10年間の精神鎮静法適応の推移

○小島 薫里, 江上 史倫, 山本 圭子,
富岡 敬子, 川上 譲治, 道谷 弘之,
武藤 寿孝, 金澤 正昭, 平 博彦*,
柴田 敏之*, 有末 眞*, 河合 拓郎**,
大桶 華子**, 加藤 元康**, 工藤 勝**,
國分 正廣**, 新家 昇**

(北海道医療大学歯学部口腔外科学第一講座, 口腔外科学第二講座*, 歯科麻酔学講座**)

近年, “疼痛や不安感などのストレスを可及的に軽減する治療を”, という時代のニーズに応え, 一般歯科治療において精神鎮静法が広く用いられるようになってきた。精神鎮静法には吸入鎮静法と, 静脈内鎮静法とがあり, 迅速かつ確実に効果を期待できる後者が本学では多く施行されている, 我々も口腔外科小手術に対し本法を応用し, 良好な結果を得ている。

今回, 精神鎮静法を用いた口腔外科小手術の症例を過去10年間遡り, 局所麻酔単独で行われた症例と対比してみた。過去10年間に行われた口腔外科小手術症例は3872例で, このうち精神鎮静法が用いられた症例は, 約300症例あり, 全口腔外科小手術症例の7.3%を占めていたが, 静脈内精神鎮静法適応症例は平成6年度から経年的に増加し, 9年度では70例15.3%に達していた。また, 年齢別にみると6歳~89歳と広い年齢にわたっていた。適応症例としては, 比較的手術侵襲度の高い埋伏智歯抜歯を始め, 上顎洞根治術なども含まれ, また, 局所麻酔単独

で口腔小手術を施行するとストレスのため, 何からの偶発症を誘発すると予想される高血圧症, 心疾患などの有病者に, さらに, 嘔吐反射の強い患者や, 歯科治療恐怖症患者, 過換気症候群患者などにも適応された。口腔外科医局内でアンケート調査を行い, 患者と術者それぞれの立場からの評価や, 感想などをまとめ, 精神鎮静法に対する意識についても考察してみた。患者からの感想には, 術中の記憶がない, 手術時間が実際の時間より短く感じた。楽だったというものが多かった。術者の精神鎮静法に対する総合的な評価は, 有効であるというものが多く, 否定的な返答はなかった。また, 術者の精神鎮静法適応例における手術の操作性については, 良好であるというものが半数以上を占めていた。しかし, 鎮静法施行に至るまでの諸手続が複雑で時間を要することから, 今後はこれらの手続きの簡素化による迅速な対応が肝要であると考えられた。

15. 当科における第三大臼歯抜歯症例の臨床統計的観察

○島田 敦夫, 藤田 景子, 吉田 直子,
角尾 三咲, 秋月 一城
(北海道社会保険中央病院歯科口腔外科)

【目的】今回当科における第三大臼歯抜歯症例の抜歯に至った施行条件を明らかにするため統計的調査を行い, また質問紙法の1つであるPOMSを用いて第三大臼歯抜歯の感情プロフィールを観察した。

【対象】オルソパントモグラムで第三大臼歯の存在が認められた患者1006名

(男477名 女529名 2537歯, 年齢9~83歳) (1006名中の抜歯症例285例 421歯)

調査期間: 93年4月~98年12月

【方法】対象患者の性別, 年齢分布, 第三大臼歯保有状況を調べた。観察された全第三大臼歯をオルソパントモ

グラムで処置経験, 萌出状態, 萌出程度, 歯軸傾斜, 歯冠・歯根形態, 歯根数, 根完成の有無, 上顎洞・下顎管との位置関係について症例全体と抜歯症例で観察した。さらに抜歯理由と予後を調査した。またPOMSを用いて術前・術後の感情プロフィールを比較した。

【結果と考察】

今回の抜歯症例には以下の傾向がみられた。

主訴: 疼痛 (50.1%)

年齢分布: 20代 (30.2%)

未処置歯の抜歯 (85.0%)

歯牙萌出状態: 上顎→完全萌出(67.9%), 下顎→半埋伏

(49.5%)

歯牙萌出程度：隣在歯歯頸部より上方（上顎，下顎とも約87.0%）

歯軸傾斜：上顎→正常（68%），下顎→正常，近心傾斜，水平（各約30%）

予後：予後不良報告26症例のうち後疼痛（83.3%）

抜歯症例の年齢分布が20代に高頻度だったのは智歯萌出年齢の合致，矯正治療の普及，顎の未発達等が推察でき

る。萌出状態では不潔域となる状態や萌出不能状態での抜歯が多く認められた。これらより第三大臼歯の抜歯は矯正処置や予想外の疼痛，歯科医師の勧告によるものが多く口腔全体の健康への影響が鍵になると考えられる。またPOMSの観察により症例によっては著しい心理変化をきたすこともうかがえた。今回の観察で臨床における抜歯決定の重要性と責任，患者の心理的負担の軽減について改めて考えさせられる結果となった。

16. 半導体TiO₂の光触媒効果に関する研究

—C. albicansに対する抗菌効果—

○久保 裕治，澤田 教彰，坂口 邦彦，
馬場 久衛*，日景 盛，秋馬 秀成

（北海道医療大学歯学部歯科補綴学第二講座，口腔細菌学講座*）

I. 目的

我々は，人体に対して影響が少なく，光が照射されたときに抗菌，殺菌作用が発揮されるTiO₂を歯科材料に応用すること考えた。

C. albicansに対して，TiO₂粉末を添加した時の抗菌効果，及びアクリルレジン，12%金銀パラジウム合金表面に形成したTiO₂薄膜の抗菌効果について検討した。

II. 方法

粉末：TiO₂微粒子にはP-25，光源は近紫外線の蛍光ケミカルランプを用いた。

菌液は，TiO₂粉末濃度0.5%，1.0%（w/v）となるように調達したものをシャーレに分注，光源より5cmに配置し，光照射した。照射時間30分毎に120分までの反応液を回収し生残菌率を求めた。

薄膜：円板状試料（φ15mm×1mm）表面にTiO₂薄膜を形成した。[アクリルレジン：，未処理，80°C15分2回加熱処理，金銀パラジウム合金：未処理，80°C20分加熱処

理，350°C30分加熱処理] この試料上に菌液（最終濃度2.0×10⁶/ml）を滴下し，光照射した。照射時間は金銀パラジウム合金で30，60，120分。アクリルレジンでは60，120，180，240分とした。照射後菌液を回収，生残菌率を求めた。

III. 結果と考察

TiO₂粉末，TiO₂薄膜共に光触媒効果によって，C. albicansに対する抗菌性が確認された。

粉末試料では，その濃度は高く，光照射時間は長いほど大きな抗菌効果を示した。

薄膜試料の基板材質により抗菌効果に差が生じ，金銀パラジウム合金ではアクリルレジンに比べ，短時間でより強い効果みられた。

金銀パラジウム合金では，表面処理条件により，抗菌効果に差が生じた。

金銀パラジウム合金では，その成分の影響と考えられる抗菌効果が認められた。

17. Porphyromonas gingivalisのPrevotella intermedia

との共凝集に関与する1成分の遺伝子のクローニングについて

○鎌口 有秀，宮川 博史，寺山 千恵，
馬場 久衛

（北海道医療大学・歯・口腔細菌学教室）

（目的）細菌が歯周局所に定着する機構の1つとして，既に定着している細菌に結合することにより間接的に定着することが考えられる。これは共凝集として観察でき

る。今回はPorphyromonas gingivalisのPrevotella intermediaとの共凝集に関与する因子について検討した。

（方法と結果）P. gingivalisとP. intermediaとの共凝集